

短信

北天の英雄アテルイ

上田 正昭

一 中華と夷狄

明治の一〇年代から具体化する「脱亜論」は、欧米を日本の近代化のモデルとして、アジアをことさらに野蠻視・未開視した。そしてそれは欧米を「中華」とし、アジアを「夷狄」とみなした偏見と差別にもとづく思想であつた。

それはつぎのような福沢諭吉の「脱亜入欧」の主張をみてもわかる。福沢は明治一四年（一八八一）に公にした「時事小言」で、「我が近隣」なる中国・朝鮮などを論じていう。「遅鈍にしてその勢に当たること能はざるは、木造板屋の火に堪へざるものに等し。故に我が日本の武力を以てこれを保護し、文以てこれを誘導し、速に我が例に倣つて近時の文明に入らしめざるべからず。或は止むを得ざるの場合に於ては、力を以てその進歩を脅

迫するも可なり」と。

そしてさらに明治一八年の「脱亜論」では、中国や朝鮮に「接するの法も、隣国なるが故にとて特別の会釈に及ばず、正に西洋人がこれに接するの風に從て処分すべきのみ。悪友を親しむ者は共に悪名を免がるべからず。我れは心に於て亜細亞東方の悪友を謝絶するものなり」と断言してはばからなかつた。

こうした「中華」・「夷狄」の観念は、古代から存在した。中国は古くから皇帝の統治する国を「中華」として、周辺の国や民族を「夷狄」とみなしていた。それは東夷・北狄・西戎・南蛮とする差別的な地域観にもはつきりと示されている。

ところが「倭国」が「日本国」と改まり、「大王」が「天皇」と称されるようになる七世紀中葉以降になると、日本の支配者層は、日本を東夷のなかの「中華」と強く意

識するようになる。そして日本に使節を派遣してくる新羅や渤海などを「朝貢国」・「蕃国」として処遇した。それは大宝元年（七〇一）に完成して翌年から実施された古代日本の代表的な法令である「大宝令」をみてもわかる。その法律にいうところの「隣国」とは、日本にもっとも近い新羅（その当時はいわゆる統一新羅）を指すのではなく、中国（唐）であつて、新羅は法のなかでもはつきりと「蕃国」とよばれていた。

そのことは「大宝令」の注釈書で、天平一〇年（七三八）の正月から三月のところに書かれた『古記』（『令集解』所収）に、「隣国は大唐、蕃国は新羅なり」と書かれているのをも明らかである。そして唐には敬意を表して「大唐」と記していた。

そこには中国（大唐）からみれば日本は東夷だが、東夷のなかの日本は「中華」であつて、新羅や渤海などは、日本に朝貢する「蕃国」なのだとする、日本版中華思想が顕在化していた。したがって、日本はたとえば『続日本紀』の文武天皇三年七月一九日の条に述べるように「度感嶋（徳之島）、中国に通ずること、是に始まる」とか養老六年閏四月二五日の条にみえるとおりの「蓋し中国を安んずるを以てなり」とかと、日本みずからを「中国」と称したのである。ここにいう「中国」は日本列島のな

かの「中国地方」などという中国ではなく、日本国そのものを意味しており、日本を東夷のなかの「中華」と意識して「中国」と表現している。私などはこうした観念を日本版中華思想とよんでいる。

東夷のなかの「中華」であるためには、日本列島のなかに「夷狄」をこしらえる必要がある。その「夷狄」とされたのが、東北などに住む「蝦夷」「毛人」と称された人びとであり、南九州の熊襲・隼人などよばれた人びとであつた。

「大宝令」や、「大宝令」のつぎに制定された「養老令」の賦役令（税や力役、徴発の手續などの法令）の条文にみえる「夷人雑類」について、前述の『古記』はつぎのように明記している。すなわち「夷人雑類は毛人・肥人・阿麻弥（奄美）人等の類」と述べ、「夷人雑類は一か二か」という問いに答えて「本は一、末は二、たとへば隼人・毛人（蝦夷）、本土にこれを夷と謂ふなり」と記す。

こうした「夷狄」観にもとづいて、飛鳥浄御原宮・藤原京・平城京・平安京の支配者層が『日本書紀』や『続日本紀』などの勅撰の歴史書を編纂したのである。都を「中央」とし、「夷狄」の地域を「辺境」とするような、あやまれる「中央史観」で、「蝦夷」や「隼人」などとさげすまれた人びとの歴史が綴られることになる。現在

の人びとのなかにもそのような「夷狄」観から未解放の考え方がまだまだ多い。

二 アテルイと田村麻呂

『日本書紀』の景行天皇四〇年七月の条には「蝦夷」にかんするつぎの記載がある。

其の東の夷は、識性暴び強し。凌犯を宗とす。村に長無く、邑に首勿し。各封境を貪りて、並に相盜略む。亦山に邪しき神有り。郊に姦しき鬼有り。衢に遮り徑を塞ぐ。多に人を苦びしむ。其の東の夷の中に、蝦夷は是尤だ強し。男女交り居りて、父子別無し。冬は穴に宿、夏は櫟に住む。毛を衣き血を飲みて、昆弟相疑ふ。山に登ること飛ぶ禽の如く、草を行ること走ぐる獸の如し。恩を承けては忘る。怨を見ては必ず報ゆ。是を以て、箭を頭髻に藏し、刀を衣の中に佩く。或いは黨類を聚めて、邊堺を犯す。或いは農桑を伺ひて人民を略む。撃てば草に隠る。追へば山に入る。故、往古より以來、未だ王化に染はず。

この文章にはたとえば中国古典の『史記』に記す「父子別無く、室を同じふして居る」の文とか、『礼記』の「冬は則ち窟に居營し、夏は櫟巢に居る」とかの文とかを借

用して、「蝦夷」と称された人びとが、いかに未開であり野蛮であったかを誇張して表現している。こうした『日本書紀』の蝦夷観で、東北などの人びとを論じるなら、それは偏見というほかはない。

『続日本紀』などには狩猟などをしている「山夷」、農耕をいとなむ「田夷」という表現があるけれども、海上の道によって沿岸諸地域や海外の人びとも交易した海の民（「海夷」）も実際に存在した（『上田正昭著作集』5）。いわゆる「中央史観」によって書かれた文書や記録によってでなく、正確な史実にもとづいて、いわゆる「辺境」の人びとの実像を明らかにすることが肝要である。

秋田県仙北郡田沢湖町にある劇団わらび座が、二〇〇一年からわらび座劇場で公演を開始し、翌年から全国各地での上演を展開しているミュージカル「アテルイ」は、そうしたあやまれる「中央史観」を問いただすのに大きく寄与する。ここではまずミュージカル「アテルイ」の主人公、北天の英雄アテルイ及びアテルイと戦火をまじえた坂上田村麻呂の人間像を改めてみきわめることしよう。

延暦一〇年（七九一）の七月に大伴弟麻呂が「征夷大使」となり、坂上田村麻呂がその「副使」となって蝦夷征討におもむき、さらに延暦一六年の十一月、「征夷

大將軍」に任命された田村麻呂は、延暦二〇年の二月に「節刀」を与えられて蝦夷の反乱の鎮定にあたった。そのため坂上田村麻呂は、とかく傲慢な侵略者とみなされがちである。

他方、延暦七年の七月、「征夷大使」に任命された紀古佐美の大軍を迎え撃つて大敗に追い込み、大伴弟麻呂ついで坂上田村麻呂の征討軍と果敢に戦った蝦夷の勇将アテルイ（阿弋流為）、副将モレ（母禮）は、強暴な「蛮族」の首長と思われがちである。

しかしそうした見方が一面的であることは、史料を丹念にひもといてゆけばわかる。坂上田村麻呂の祖先は、高松塚やキトラ古墳のある奈良県明日香村松隈のあたりを本拠とした百濟・加耶系の渡来氏族である東漢氏であった。『続日本紀』の宝龜三年（七七二）四月の条に、田村麻呂の父である菟田麻呂が、高市郡内に、「他姓の者は十にして一・二」と奏言しているように、誇張があるとはいえ、その一族の多数が松隈の地を中心に居住していたことはたしかであった。

坂上田村麻呂の先祖は異国の人であって、その努力によって父は左京大夫・右衛士督まで昇進したのである。田村麻呂は弘仁二年（八一二）五月二三日にこの世を去ったが、『日本後紀』の薨伝は「勇力人に過ぎ、将帥の

量（力量）あり」と記す。だが田村麻呂はたんなる勇将ではなかった。信仰心の篤い巨人であった。京都東山の清水寺の縁起では、賢心（延鎮）上人が千手観音をまつたのにはじまると伝えるが、田村麻呂の発願によって清水寺は造営され、妻の高子が仏殿、娘春子の子葛井親王が三重塔を寄進している。このように清水寺と田村麻呂との関係は密接であった。

蝦夷の軍勢を率いて果敢に闘ったアテルイやモレもたんなる「蛮勇」の人ではなかった。田村麻呂もその武勇と器量を高く評価していた。したがって『日本紀略』や『類聚国史』が描くように、「帰属」したアテルイ・モレの助命を嘆願し、「帰属」後も蝦夷地での活躍を期待したのである。それなのに時の政府は、田村麻呂の嘆願をしりぞけて、河内国の杜山で斬首する。友情を切断された田村麻呂の無念が推察される。

三 ミュージカル「アテルイ」

ミュージカル「アテルイ―北の耀星」は、高橋克彦さんの吉川英治文学賞の受賞作「火怨 北の耀星アテルイ」を原作とする歌と踊りの歌劇である。史実を背景に創作されており、「蝦夷」の支配を貫徹しようとする朝廷に敢然と抵抗し決起する勇将アテルイ・副将モレと征夷大

將軍坂上田村麻呂との葛藤と友情がその主題になっている。ヒロイン佳奈をめぐる恋のもつれがその内容にいろいろをそえる。

わらび座の招きで私が田沢湖町を訪れたのは、二〇〇一年の八月中旬であった。わらび座公演のミュージカル「アテルイ」への助言と、慶長一二年（一六〇七）から文化八年（一八一二）にかけての朝鮮通信使をミュージカル化するための講演が招請の目的であった。自給自足の生活をいとなみ、温泉と宿泊所を営しながら演劇活動をつづけている、わらび座の人びとの意気ごみとその情熱が言動のはしばしにみなぎっていた。

わらび座の劇場で観劇したが、こころざしをひとつにする劇団員の歌と踊りと東北の風土に根ざしてのオリジナリティが私の胸に熱くこだました。時代考証の不十分なくつつかの点を指摘したが、なるべく史実にそくしてのその熱演は見事であった。善隣友好の朝鮮通信使をテーマとするミュージカルも、ジェームス三木さんの脚本と演出で、ミュージカル「つばめ」として具体化して、現在その公演が全国的にくりひろげられている。

本年の四月二四日、清水寺でミュージカル「アテルイ」の京都公演に先立っての奉納公演があった。なぜ清水寺を舞台としての奉納公演が行なわれたのか。そこには前

にも言及したような坂上田村麻呂と清水寺とのゆかりがあった。一九九四年は平安建都千二百年の節目の年であったが、岩手県のアテルイを顕彰する会・関西岩手県人会・京都岩手県人会の皆さんが、アテルイ（阿弖流為）・モレ（母禮）の顕彰碑を建てられたのが清水寺の境内であった。アテルイと坂上田村麻呂との友情にちなんでの鎮魂碑といってよい。

特定のイデオロギーや歪曲された史観で、安易に地域や人物を評価したり批判したりするわけにはいかない。史実を検証し、史実にそくして、地域や人物を見直す必要がある。「中華」・「夷狄」のものの方や考え方を、ミュージカル「アテルイ」が改めて問いただす。



上 アテルイたちの合唱（わらび座）／下 京都市東山区清水寺のアテルイ・モレの碑